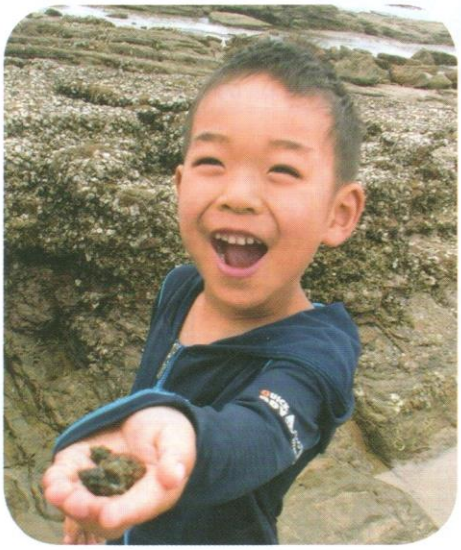
# 子どもと楽しむ観察会

日本自然保護協会の会報「自然保護」№.532 号（2013 年 3･4 月号）

P10 に SSN の記事が掲載

特集

# 子どもと楽しむ自然観察



自然体験の減少が指摘される最近の子どもたちですが、
今も昔も自然への興味・好奇心は変わりません。
今回の特集では、自然大好きな大人たちから子どもたちへ、
自然の魅力を伝えるためのコツをお届けします。

## なぜ子どもには自然とのふれあいが必要か

### 子どもの能力を伸ばす

子どもから大人からまで自然の豊かな恵みを享受する自然とのふれあいは、生態系の一部である人間が自然との共生の理解を深めていく基本的な行動といえます。しかし近年、日本各地で身近な自然環境が消失したり、地球温暖化に代表される地球環境問題が深刻化するなど、「外なる自然」破壊が進んでいます。さらに人間が本来もっている感受性や五感の劣化、人間関係や対人関係のつまづきによるいじめ問題の拡大、孤独への不安など、「内なる自然」破壊も起こっています。

近年の子どもに共通する性格傾向として、自己中心的、パニックに陥りやすい、粗暴である、などが指摘されています。この背景には自律神経調整の乱れ、大脳の活動水準低下などが指摘されていますが、その要因のひとつとして、子どもの自然体験や生活体験が不足しているのではないかという声が高まってきているのです。

ある調査（＊）では、子どものころに、自然体験や地域活動などの「体験」が多い高校生ほど、思いやり、やる気、人間関係能力などの資質・能力が高いという結果を得ています。また、豊かな「体験」は、言葉を豊かにし、想像力を高めていきます。私の経験でも体験の豊かな子どもの文章は生き生きとした表現力で、語彙（ごい）も豊富で、コミュニケーション能力が高いといえます。一方、体験の貧弱な子どもの表現は抽象的で訴える力が弱い傾向にあります。豊かな言語能力は、自分の気持ちを他者に伝えたり、人の気持ちを想像する力になります。

子どもにとって「自然にふれる」という体験は、水や土、緑にふれたり、小さな昆虫の命に自分の命を重ねたりして、「内なる自然」を豊かにすることでもあるのです。

小澤紀美子（こざわきみこ）
（東海大学名誉教授）
専門は環境教育学

＊「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」国立青少年教育振興機構（2010）

写真左上：桝野正博、写真右上：一寸木 肇

# 発見を楽しむ達人の観察会

小学校の先生を務めながら、NACS-J自然観察指導員講習会講師として30年活動してきた一寸木さん。子どもたちとの観察会の達人に、大切なポイントを伺いました。

一寸木（ちょっき） 肇（はじめ）
（おおい自然園園長／自然観察指導員神奈川連絡会）元小学校校長

## 発見の喜びを共有する

ある初夏の日、入園から2カ月が過ぎて落ち着いてきた保育園の園児たちと「探検」に出かけました。近所の保育園が四季を通して行っているお散歩に時々お邪魔して、一緒に裏山に出かけているのです。園児たちは慣れたもので、ちょっと転んでも滑っても、泣き言は言いません。たくましく育っているのが分かります。

幼児と歩くとき、特に大切にしていることがあります。それは、野外を歩くことの楽しさを体感させ、さまざまな生きものとの出会いを大切にし、五官（五感）を働かせるよう促すことです。「今日は気持ちいいなあ」から始まり、「すごい。すてきな葉っぱを見つけたね」。すかさず「では、もんでにおいを嗅いでみよう」。そして、終盤では「おなかがすいたねえ」と話かける。こんな調子です。

「探検」と聞くと子どもたちは俄然（がぜん）張り切ります。何げない場所でもいろいろなものを見つけます。名前は二の次。まずはその発見を大切にして、見つけた喜びを共有するのです。

## ヤブヘビイチゴを食べてみよう

この時季いつも行っているのが、園児たちとヤブヘビイチゴを食べることです。果実を見つけると、子どもたちに、「食べてごらん。毒はないから大丈夫だよ」と促しながら、自分でも口に含みます。

ヘビイチゴ類は、その名からか毒があるとなんとなく思われていますが無毒です。ヘビと聞いただけで、身震いし嫌悪の表情を浮かべる方もいます。しかし、小さいころから、食べられるもの、また毒があって食べられないものを判別できることは、非常時対策だけでなく、その人の人生を豊かなものにしてくれるのではないかと、私は考えるのです。

土手でイタドリの茎をかじってみるのも、熟したクワの実で口のまわりを染めるのも、豊かに生きている証ではないでしょうか。特に幼児や児童にとっては、生きものと初めて出会ったときの大人の態度で、その生きものに対する印象がすっかり変わってしまいます。野山のさまざまな生きものと出会ったとき、慌てずしっかりと観察できることは、「生きる力」のひとつとして、一生その人に小さな幸せをたくさん運ぶに違いないと、私は信じているのです。

1㎝ほどの赤い果実をつけたヤブヘビイチゴ。砂糖とレモンを加えてジャムをつくり食べるのも楽しい。アレルギーの有無などは事前に確認しておきたい。

### 一寸木さんの五カ条

1. 子どもの発見や考えを大切に。教え込もうとしない。
2. 子どもから学ぶ姿勢をもつ。「教えてくれてありがとう」「今日は、あなたたちと過ごせてとっても楽しかった」のひと言を忘れない。
3. 笑顔と誠実さと安心を。子どもたちは、こちらの思いを見抜きます。
4. 発言する子だけにとらわれない。子どもの表現は、絵に描いたりつぶやいたりとさまざま。表情の変化を見逃さないように。
5. 保護者や地域の方々との信頼関係を。楽しく安全な活動には周囲の協力が必要不可欠。

# 観察会をやってみよう！

実際に観察会を開くときのポイントを、経験豊富な自然観察指導員の皆さんに聞きました。

準備編

## 企画

▲冬に張っている氷を見るだけでも楽しい。

子どもたちとの自然観察で大切にしたいのが「解説よりも体験」。野外に連れ出す企画を立てるときは欲張ってプログラムを詰め込まず、ゆとりを持たせると、子どもたちの興味にあわせて楽しむことができます。観察する対象は少なくても、子ども自身にいろいろな体験をさせ、しっかり観察することが、野外での観察の醍醐味です。

引率する大人の人数もしっかり検討したい点。「子ども6～8人にスタッフ2人を配置」（善福寺自然かんさつ会）や、「学校での観察会の時でも10人に1人」（自然観察ちば）、「1人で子ども10～15人くらいと観察会をやることもあるが、多い場合は子どもを2人一組にして、2人で協力していろいろ発見してもらう」（植原 彰さん）など、状況や参加人数に応じて子どもの興味関心を引き出したり安全管理ができるように工夫しましょう。

幼児15名に対して指導員が1名だったとき。足元に小さな発見があり、みんなに見せてあげたいと思い子どもを集めましたが、興味津々の子どもたちは指導者の周りにギュッと集まり見られたのは6名程度。前後を入れ替え順番に見せようとしましたが、気がつけば観察対象物は子どもに踏まれ、後半はきちんと見ることができませんでした。適切な班編成や子どもの行動を上手に誘導するテクニックは大切！と痛感しました。（星野由美子さん）

## プログラムの検討

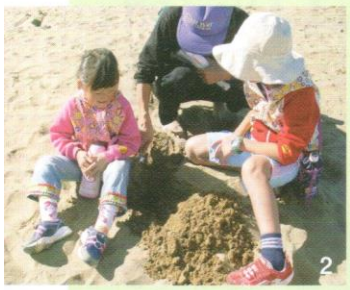
五感を使うこと、子どもたちが主体的に取り組めることが大事なポイント。テーマは子どもたちの身近な生きものや場所にすると関心が高まります。また、田植えや釣り、山菜採りといった目的のある活動とつなげてみたり、「遊び心」を加えた活動にしてみると、大いに盛り上がります。

### 定番プログラムを教えてください！

#### ■五感を使おう！

●ヘクソカズラの葉をもんでにおいを覚える。蚊に刺されたときの特効薬。蚊がいるところにはたいてい生えているので、幼稚園児以上の夏の定番です。（一寸木肇さん）

●鳥取砂丘の観察会でやるのは「横穴式落とし穴」。1人を砂の上に体操座りをさせ、もう1人がその真横に穴を掘っていくと、座っていた人のお尻が一気に掘った穴へ落ち込みます。面白いので子どもたちは何度も工夫しながら繰り返します。しばらく遊んでから、気付いたことを尋ねると「湿っていた」「ひんやりしていた」といったことを教えてくれます。砂丘の生きものや自然を知るうえでとても大切な体験です。（清末幸久さん）



●冬の室内プログラムでも、数種類の木片を配って香りや肌触りの違いを楽しんだり、虫の鳴き声聴き比べをしたり五感を使えるようにしています。（田上貴文さん）

#### ■身近なテーマで！

●セミの羽化観察は定番ですがとても人気。夕方薄暗くなりかけたころ、幼虫が歩いているところから探します。羽化のプロセスを箇条書きしたワークシートを持って、その進行を楽しみながら観察します。（中塚隆雄さん）

●巣箱の清掃：地域にかけている巣箱を、ジュウシカラやスズメが繁殖に入る少し前にはずして中を掃除する。自分たちで巣箱を開けると、孵化しなかった卵や成長できなかったヒナの死骸、巣材の中で冬越しをしている虫が出てきて、予想外の発見にワクワクドキドキです。（中塚隆雄さん）

#### ■自分でやってみよう！

●「この松ぼっくりは誰が食べたの?」からスタートして、周辺の動物の痕跡や、動物の食べ物、環境と生きもののつながりを「宝探し」的な雰囲気になるように声掛けしながら探しています。（星野由美子さん）

●ホタルの紙芝居：ホタルの生態解説とマナーの啓発を兼ねた紙芝居。ホタル自体の魅力もありますが、子どもたちは、自分が説明役（主役）になってお客さんの反応を受けることが楽しいようです。（中塚隆雄さん）

## 安全管理

リーダーは必ず水を携帯。飲んだり、冷やしたり、洗ったり。何にでも使える万能薬です。空ペットボトルに水道水を入れておけばいいでしょう。（植原 彰さん）

森での木登りや崖すべり、川での生きもの探しや、たき火など……、日常ではなかなかできない「危ないこと」ですが、そこにはたくさんの感動が詰まっています。起こりうる危険を大人が十分に理解し、予想して注意深く見守りながら、できる限り「ダメと言わない」姿勢を保ちたいもの。下見は当日と同じ時間帯に実施して起こり得る危険を想定し、複数の対応案を考えスタッフで事前に共有しましょう。

### 思わぬ事故を避けるために

- 『野外における危険な生物』日本自然保護協会（1994）平凡社　2100円
- 『海の危険生物ガイドブック』山本典暎（2004）阪急コミュニケーションズ　2520円
- 『危険・有毒生物』今泉忠明・高橋秀男（2012）学研教育出版　1008円
- 『レスキューハンドブック』藤原尚雄・羽根田治（2002）山と渓谷社　1029円

当日編

## 本番

観察会当日は、まずは子どもたちと仲良く楽しく始めることが一番。子どもたちと同じような言葉を使ったり、かがんで目線をあわせたりしながら距離を縮め「一緒に楽しもう！」という雰囲気をつくりたいところ。大人の楽しい気持ちはしっかりと子どもたちに伝わります。以前からお友だちだったようにテンションを高くしたり、子どもに呼んでもらいやすいあだ名で自己紹介したり、いろいろな工夫のしどころです。

園児との室内プログラムでは、いきものの国から来たムシキングとその仲間たちというキャラクターを設定し、手づくりの羽や触角をつけて親しみやすい格好に変装し、大きな写真を使い虫クイズを実施。集中力がもつのは10分程度と言われる幼児たちなので、体で楽しむオリジナルの「むしむしダンス」をしたり、その後静かに虫の声の聴き比べをしたり、変化や緩急をつけるようにしています。（田上貴文さん）

観察会に初めて参加する子がいるときには、開始前に「お名前は?」「どんな生きものが好き?」など、積極的に話しかけて緊張感を解きほぐしながら情報収集。（植原 彰さん）

野外に出たら主役は子どもたち。説明は二の次にして、子どもたち自身にチャレンジさせ、発見に共感し、さらなる発見につながるような問いかけをすると、張り切って取り組めます。間違った想像をしてもすぐに否定せず「なるほど」「そういうこともあるかもしれない」と認めてあげましょう。説明するときには、クイズ形式にすると集中力が途切れません。楽しむ一方で、自然を傷つけないためのフィールドマナーの指導も大切です。

観察会の移動中や観察中などに、観察対象に関する唱歌・童謡などを歌っています。（町田三郎さん）

すべての子どもに自分のことを見ていると感じさせるような目線の使い方を心掛けています。また表情もにこにこしたりびっくりしたりと豊かに。お手本はテレビの歌のお兄さんです。（植原 彰さん）

子どもが「これなあに?」と聞く時は必ずしもその名前を教えてほしいのではなく、発見を誰かに伝えたい気持ちが強いと思います。「いいもの見つけたね」「なんだろう」と発見を共有しています。

幼児たちは「採らない」と約束してもすぐに手に取ってしまうもの。体験は大切ですが、採ってはいけない動植物がある場合は、あえてその話題に触れないこともあります。（星野真由美さん）

## 保護者の対応

子ども向けの自然観察であっても、発見し感動を共有するプログラムなら、そのままで大人も十分楽しめます。ただ、保護者が一緒に観察会に参加すると、子どもの作業を手伝ってしまったり、つい引き留めてしまったりと子どもの体験のチャンスを減らしてしまうことも少なくありません。大人と子どもそれぞれが主体的に取り組めるような工夫が大切です。

また、保護者は安全管理やイベント運営などにに協力してくれる大切な仲間たちにもなります。企画や計画は事前に（あるいは当日に）きちんと共有し、信頼関係を築いていきたいところ。子どもを通じて自然の魅力を大人たちに伝える貴重な機会にもなります。

▲プログラムよっては大人のほうが夢中になることも。

観察会自体は子ども目線で行いますが、保護者（特に母親）にも観察会を好きになってもらえるよう、保護者に対し個別に補足説明をすることも。観察のチェックリストは子どもと保護者それぞれに渡し、保護者にも参加意識を高めてもらいます。（安藤伸良さん・宇田川文明さん）

定期的に行っている子ども向け観察会では、毎回一週間ほど前に、保護者向けに計画を広報の紙できちんと連絡。活動の準備や時間の間違いをなくすだけでなく、子どもたちの活動内容を理解してもらうのにも役立ちます。（中塚隆雄さん）

## まとめ・ふりかえり

見つけた印象の深いものを、絵と五感を表す言葉で「観察カード」に記入してもらい、フィールドの大きな地図に貼って、ふりかえりに使います。（中塚隆雄さん）

楽しいだけで終わらせないために欠かせないのが、見つけたものの共有やふりかえり。事前に子どもたちに「見つけたものは教えてね」とお願いしておいてその都度みんなで共有したり、自分が見つけた印象深いものを記入してもらうワークシートを配って最後にまとめて共有したり。親子で散歩をしながらの自然観察でも「今日はすごいの見つけたね」と一言かけるだけでグッと心に残ります。

写真2、7：清末幸久、写真3、8、9：中塚隆雄、
写真4：（社）ESDキッズクラブ

# 観察会を盛り上げるとっておきアイテム

## 絵本

一回の観察会に3〜4冊程用意します。最初に読んで興味を引いたり、途中で観察しながら補足資料にしたり、最後にふりかえりで使ったりします。絵本の三段活用です。（植原 彰さん）

ポプラ社/いのちのカプセルまゆ¥1260

## 日本の伝統色の色彩カード

チップに穴をあけてリングに通したものをグループにひとつ渡し、自然の中の色探しに使います。やや高学年向き。（上田弘子さん）

DICグラフィックス㈱/日本の伝統色¥9345

## 磁気式メモボード

字も絵も描けて、雨の日でも水中でも使える便利なアイテム。小さなサイズが使いやすい。（一寸木肇さんほか）

PILOT/ジッキースーパーライトハンディタイプ¥1575

## タブレット端末

観察の補足説明のため、セミの羽化のシーンを早送りで見せるなどiPadを利用します。ただ、iPad自体に興味を持ってしまう子どもも多いので限定的に使用しています。（大澤 真さん）

Apple社/iPad2 ¥34800〜

## 携帯顕微鏡

花を採らずに花粉だけ採取して、参加者に見てもらうなど、ローインパクトに自然の造詣の深さに迫ることができる。やや高学年向き。（一寸木肇さん）

池田レンズ工業㈱輸入/ライト付き小型顕微鏡100倍¥3150など

## 不透明なフィルムケース

中に何が入っているか当ててもらったり、サンプルを入れたりします。（星野由美子さん）

## 透明なケース

壊れそうなもの、昆虫、水の生きものなどを入れて観察できる。焼酎の200mlペットボトルでもOK。（星野由美子さんほか）

## 大きなピンセット

棘・毒のある危ないものや、隙間にある小さなものをつかんで見せられる。30cmくらいあると便利。長い菜箸などでも代用可能。（一寸木肇さん）

## ラミネーター

画像・資料などを野外でも示しやすくする。以前に比べフィルムも薄くなり、機器も3000円代から入手可能に。（大澤 真さん）

アイリスオーヤマ/ラミネーター LTA42E ¥3980

## おすすめの資料

- ●『小さな自然観察―子どもと楽しむ身近な自然―』日本自然保護協会（1992）平凡社 2500円
- ●『センス・オブ・ワンダー』レイチェル・L.カーソン（1996）新潮社　1470円
- ●『復刊　自然の観察』日置光久ほか（2009）農文協　4700円
- ●インタープリテーションネットワーク・ジャパンウェブサイト http://www.geocities.jp/ipnetj/pg/pgsyoukai.html

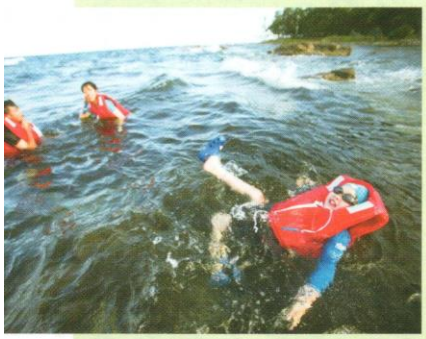
※商品は一例です。

アンケートにご協力いただいた自然観察指導員の方々（敬称略）：安藤伸良（善福寺自然かんさつ会）、上田弘子（自然観察やまぼうし）、植原 彰（乙女高原ファンクラブ）＊、宇田川文明（善福寺自然かんさつ会）、大澤 真（善福寺自然かんさつ会）、小沢 潤（大三島の自然を守る会）、勝山智男（自然観察指導員東京連絡会）＊、清末幸久（自然観察指導員鳥取連絡会）＊、国安俊夫（ぐんま自然観察指導員会）、田上貴文（(社)ESDキッズクラブ）、中塚隆雄（港南台自然観察クラブ・クロロ）、星野由美子（島根県立三瓶自然館）＊、本多 孝（(社)インタープリテーションネットワーク・ジャパン）、町田三郎（善福寺自然かんさつ会）／＊印の方は自然観察指導員講習会講師

# 福島の子どもたちに自然体験を

桝野正博（ますのまさひろ）
（ふくしま・かなざわキッズ交流キャンプ）


ふくしま・かなざわキッズ交流キャンプは、放射能汚染によって野外活動を制限されている福島の子どもたちの笑顔と元気を応援するために、いしかわ自然学校のインストラクター有志6人が集まり始めました。私たちは、放射能被ばくから子どもたちを守ることは日本の大人としての責務だと考えています。



幸い石川県は美しい自然に囲まれ、子どもたちに開放的に飛び回ってもらうには絶好の環境が揃っています。プログラムは、原発事故があったがために出会うことになった友だちと共に、将来に渡ってたくましく生きてもらいたいとの願いを込めて地元石川の子どもたちとの交流の場にしました。

2012年春の会発足後、夏と冬の2回キャンプを開催しました。夏は福島からの参加者はわずかに6人、全員で13人でしたが、17日間、海山で思い切り遊びました。冬は参加者の声を参考に保護者同伴も可能にし、日程は4泊5日にしました。テーマは「ぬくもり村の大家族」。お母さんや幼児を含め47人、スタッフと合わせ総勢70人ほどが共同で、毎日冬の自然とふれあいながら過ごしました。

このキャンプは自由を尊重しています。ツリークライミングや水族館見物などのプログラムも一部組まれていましたが、基本は、あくまでも子どもたちが自然の中で思いのままに過ごせるキャンプにしました。それは、子どもたちだけでなく大人にも、心も体も開放してもらいたいからです。参加者にはとても好評でした。何も用意しなくても、遊びは新たに生まれるもののようです。この創造性こそ、自由がもたらすものではないでしょうか。

保護者からはもう少ししつけの面も見て欲しいとの希望もありましたが、人手不足もあり今はそこまでは対応しないでいます。ここでのよき指導者は、原発を容認してきた大人ではなく、「自然そのもの」なのではないかと思うからでもありますが。

（関連記事24ページ）

# お母さんたちの声で始まった「谷戸体験」授業

小学生たちに稲作や里やま保全活動を体験してもらう「谷戸体験」授業に、地元の小学校と連携して10年以上取り組んできた山崎・谷戸の会。学校との連携の始まりや活動のコツについて伺いました。

相川明子（あいかわあきこ）
（NPO法人 山崎・谷戸の会）

## 始まりは青空自主保育

1985年、懐かしい日本の原風景が残る神奈川県鎌倉市の「山崎の谷戸」を拠点に、1～4歳児の母親たちが青空自主保育を始めました。土の道にできる水たまりで泥団子をこね、小川に裸で入り、アシやススキの間で弁当を食べ、生きものに素手で触るといった自然体験は、仲間や親たちと共に味わうことで子どもの伸びる力を引き出し、社会性を育てる原動力となってきました。

しかし、1990年に鎌倉市によって、山崎の谷戸の田んぼをデイキャンプ場に、畑を野外劇場にする鎌倉中央公園建設計画が発表されたのです。そこで、青空自主保育を行っていた母親たちが中心となり新たな市民活動団体を立ち上げ、里やまの生態系と景観が残る市民参加の公園づくりを訴えました。これが、私たち「山崎・谷戸の会」発足のきっかけでした。

## PTAで活躍する親たちが学校にはたらきかけ

活動の目的のひとつは、谷戸を子どもの環境教育の場として活かすことでした。会の発足は周辺に変化を起こしていきました。地主さんに弟子入りして米づくり作業を始めると、近隣の県立高校の生物部や、学童保育の子どもたちがやって来たり、隣市の私立中学がクラスぐるみで湿地復元作業に訪れたりし始めたのです。

小学生、中学生になっても、谷戸で伸び伸びと育ってほしいと願う会員の親たちは、学校のPTAで活躍し、教員に谷戸での体験学習を勧めました。折りしも「小中学校の総合的な学習の時間」（以下、総合学習）が開始される前段階で、モデル校となった小・中学校や、環境教育に意欲的な教頭先生の音頭取りなどもあり、授業の一環として取り組むことになりました。

小学5年生の社会科の中で稲作を勉強するなら、谷戸の田んぼで実際に体験させたい。米をつくるだけでなく、谷戸の生態系全体を知って、谷戸の保全活動の一環としてとらえてほしい、という想いもありました。それを実現するには、田うない（耕運）、田の草取り、土手や畔の草刈り、脱穀、堆肥づくりまで、月に1回程度の谷戸通いが必要となります。近隣の市立小学校2校は、本格的に総合学習が始まった2002年度からこの年間プログラムに取り組みました。2003年度からは、6年生になっても「昔ながらの畑作業」に通い続け、稲作だけでなく、山崎の谷戸伝来の大豆「タノクロマメ」の種蒔きから味噌づくりまで、「もめんばたけ」と称される荒地の開墾から綿栽培まで、そして、二毛作の復活として、尾根の畑で小麦とさつまいもを育てることなどを体験してきました。

## どんな家庭の子どもにも自然体験のチャンスを

指導に携わるのは当会のベテラン会員たち10数名。授業2時

▲子どもたちを豊かな鎌倉の自然のなかで思いっきり遊ばせたいという想いで始まった青空自主保育「なかよし会」。全国に広がる青空自主保育の草分け的存在としても注目されていて、活動を記録したドキュメンタリー映画『さあのはらにいこう』は各地で自主上映会が行われている。
(http://noharaheikou.com/)

さぁのはらへいこう♪

青空自主保育の三年間

▼谷戸の体験をまったく知らない教員も多いことから、2008年に助成金で「谷戸の体験学習指導の手引き」の冊子を作成し、学校に配布した。体験学習の目的や段取りから、細かい作業の手順までをまとめたもの。発行以降、これを教科書として教員がしっかり予習をしてくれるようになり、作業の連携がスムーズになった。
希望者は山崎・谷戸の会事務局(TEL0467-47-1164)まで。

限分で4、5クラスの児童生徒百数十名を相手に実施するので、綿密な計画書を必ず用意しています。担当者を決めて作成し、事前に教員に渡し、体験学習の後はスタッフ一同で反省会を行い、次回に備えて報告書にまとめます。活発だった時期は週に2回も実施することがあり、授業前の準備と実施後の後始末、週末の定例の田んぼや畑の班活動に、スタッフ一同大わらわでした。しかし、普段の学校とは違った谷戸でこそ光る子がいたり、谷戸に来たいがために普段の勉強を頑張る子が増えたとの報告が担任の先生からありました。子どもの感想文には、昔の人の知恵に触れた感動、作業後の達成感などが表現され、活動や遊びの楽しそうな絵からもその効果のほどが伺えました。

最近は、文部科学省の指針の下に総合学習の時間が次第に削られてきたこともあり、6年生は谷戸へ来られなくなりましたが、代わりに低学年が四季折々に谷戸体験を行うようになりました。本格的な農作業に入る前に、授業の中で身近な自然に親しむチャンスがあるのは、子どもにも無理がなくちょうどいいと思っています。

谷戸での貴重な自然体験が、熱心な親に連れられてくる子どもだけでなく、一般市民の家庭の子どもにも平等に提供できるチャンスになるという点で、学校の授業による谷戸体験学習をこれからも大事にしたいと思っています。

学校の先生に聞きました!

## 「本物の体験をさせてあげたい」

品川 友(しながわ ゆう)
(鎌倉市立深沢小学校 教諭 2年生担任)

深沢小学校の2年生は、生活科の授業で鎌倉中央公園にある山崎の谷戸に出かけています。市街地にある学校の周辺には存在しない豊かな自然を五感を使って味わったり、環境を守るために働いている人々とふれあったりすることを通して、動植物・環境・自然を守っている人々の活動を学ぶことをねらいとした、生活科「自然となかよし」という単元の活動です。

学校から谷戸までは、小学2年生の足で歩いて30分ほど。春夏秋冬の季節ごとに、5クラス150名ほどの児童をつれて出かけています。谷戸体験の日は、1～4時間目までの午前中を使います。谷戸では、山崎・谷戸の会の皆さんと一緒に、①田植えや麦踏みなどといった活動のお手伝いをして、②それから谷戸や周りの森の中を散策し、③最後に、自由時間をつくって原っぱや森の中で思い切り遊べるようにしています。滑ったり、木や草にぶら下がって遊べる崖は大人気。感想文には、小川で発見した魚やカニ、大きさや色や形が面白い昆虫、季節によって違う畑の作物など、生きものや植物の変化を見つけたときの「小さな感動」が詳しく書かれています。

谷戸で継続的に活動し、地域を見つめ続けている方々と連携することで、季節ごとの自然の細かい変化や、その背後にある生きものたちのつながり、昔の人の知恵などを子どもたちに伝えることができるようになりました。継続的な活動があるからこそ、「今年はイノシシに作物が食べられて大変だったよ」と生きものの気配を伝えたり、雨上がりにだけ見られる「しぼり水」と呼ばれる湧水を、子どもたちに教えてもらえるのだと思います。

子どもたちの安全管理についても、会の方と連携して行っています。虫に刺されたり、小さな傷をつくることはありますが、子どもたちの充実して楽しそうな様子が伝わるのか、保護者の方々もこの活動を理解してくださっています。

谷戸体験は子どもが「本物」に触れることができる貴重な機会です。これからもこのつながりを大切にして、子どもに「小さな感動」が生まれる良い学びにつなげていきたいと思います。

# 子育て支援団体と協力して呼びかけ

奥野麦生（おくのむぎお）
（白岡緑と土の会）

昨年12月、埼玉県白岡市に残された1ha余りの雑木林「ひこべえの森」で、私たち「白岡緑と土の会」は、子育て支援団体「町ぐるみん白岡」と白岡市教育委員会との協働で、雑木林保全活動と自然観察会や焼き芋などを行う「ひこべえの森 冬の集い」を開催しました。市内の中学校4校と高校1校に参加者を募ったところ、中・高生約40名が集まり、そのほか親子や地域住民などと合わせて60名を上回るイベントになりました。当会だけで実施した過去2回の「森の集い」では6～7名の高校生の参加が精一杯でしたが、町ぐるみん白岡と上手に連携できたことで良い方向に動き始めたのだと感じています。

町ぐるみん白岡は、地域で子育て活動を行う団体同士をつなぎ、新しい取り組みに発展させる接着剤・潤滑剤の役割を担う団体で、学校応援団（学校活動を応援する地域住民のサポーター団体）の交流会や、子ども向けのスポーツイベントなどを開催しています。

今回は町ぐるみん白岡と連携し学校に呼びかけるために、「自然保護」だけでなく「子育て・教育」という側面から活動をとらえ直しました。雑木林保全活動や自然観察会には、学校教育の中では経験することのできない子どもたちのボランティア体験や、地域の人たちとの絆づくり、学校間の交流などさまざまな要素が含まれています。地域住民と学校をつなぐ学校応援団と連携している町ぐるみん白岡と協力することでさまざまな教育的要素を上手に盛り込み、「それなら子どもたちを参加させよう」と学校の先生方の気持ちを盛り上げることができたことが、学校からの参加を後押ししてくれたと思います。

今回の集いに参加した中高生がすぐに保全活動にかかわるようになるとは思っていません。しかし、彼らの心に種を播くことはできたのではないかと思っています。1月の定例活動の日、「集い」に来てくれた子どもたちの何人かが、「楽しかったから」と森を訪ねてくれました。案外早い発芽に気をよくしています。これからも子どもたちの心のシードバンクからどんな芽が出るか、楽しみに見守ろうと思います。

# 組織力で信頼関係づくり

河添寿子（かわぞえひさこ）
（千葉県自然観察指導員協議会）

千葉県自然観察指導員協議会では有志で『小学校自然観察支援ネットワーク（SSN）』を組織し、92名の指導員が県内各地の小学校に出向き、授業での自然観察を支援しています。結成12年目の2012年には、66件、延べ参加者数3734名の自然観察を支援しました。

もともとは私も個人で地元観察会を10年ほど行っていましたが、活動からできたご縁で小学校から観察会を依頼された際に、親しい指導員を誘い、児童10人ずつのグループに分けて指導したところ学校にも指導員にもとても好評でした。そこでチームの効果を実感したのです。

設立してからは、ウェブサイトやパンフレットを見た学校から依頼が来るようになりました。組織として多くの実績を重ねている点や、メンバーひとりに何かあってもほかのメンバーが対応できるといった安定感によって、学校側の信頼を得ることができたと思います。また、組織で対応するようになったことで、常に児童約10人に1名の指導員が付くグループ編成が可能になりました。少人数でよく見える・聞こえることで子どもが集中できますし、指導員も一人ひとりの発見に対応し、ふりかえりの時にゆっくり感動を共有できるようになりました。学校のある地域の指導員が担当できることも喜ばれていると思います。

会としても、メンバーそれぞれの得意分野を持ち寄ることで各自の知識や技能が上達しました。学校との事前打ち合わせの際にチェックすべき事項などをまとめたチェックリストなどをつくり共有することで、みんながスムーズに学校と企画を進められるようになりました。また、新しく指導員になった人が手伝いながら先輩の指導を見学できるので、初めの一歩を踏み出しやすいといったメリットもありました。

今では口コミなどで依頼をいただくようになりましたが、学校との連携の始まりにはメンバーが各地で継続的に観察会を行い、地域とつくってきた信頼関係がありました。学校だけでなく、子ども会や保護者会の行事などいろいろな団体と連携し、観察会を広げていくことでたくさんの可能性が広がっていくと思います。

まとめ

# 自然の中で子どもたちにつかんでほしいもの

大野正人（おおのまさと）
（NACS-J
教育普及部）

都内の公園で、親子対象の観察会を行ったある夏の日のこと。小学2年生の女の子が、生まれて初めて生きたセミをつかんで発した言葉が「セミがドキドキしているよ！」でした。ん？まさか人間のような心臓はないから、そんなはずは……と、私は疑って、同じように手にしてみたら、確かに「ドキドキ」しているのです。

◀質問には即答せず、子どもの感性を大切にしながら一緒に考えたい。（『自然観察指導の48手』より）

◀『自然観察指導の48手』日本自然保護協会（1981）400円
自然観察指導のポイントがつまった小冊子。発行から30年たった今も好評のロングセラー。

必死に飛ぼうと羽を動かす振動を、このように表現するのは子どもならではの感性で、大人になると知識や先入観によって、純粋な自然の楽しみを半減させていると気づきました。

## 生きる力をはぐくむさまざまな感覚

近代の都市型生活・情報化社会では、子どもの心身の健全な成長が危ぶまれるという問題意識から、NACS-Jでは子どもの自然体験が必要だと考えてきました。これは、次世代を担う子どもたちへの大人世代の責任です。自然の中ではきれいで心地よい体験だけでなく、チクチクべたべた、ゴツゴツぬるぬる、寒い熱い冷たい……など、普段安全な家のなかでは不快とされることも、あえて体験することが、子どもたちの「生きる力」をはぐくみます。

## 「自然観」を培うための実感

またNACS-Jでは、自然観察を通じて自然に親しみ、知ることが自然を守ることにつながると考え、「自然かんさつからはじまる自然保護」を掲げて活動を続けてきました。

幼児期の子どもたちを継続的に自然の中に連れだし、感性を大切にしながら自然に親しむことは、その後の自然への興味や関心に大きく左右します。ヒトもひとつの生物であるという実感も、五感を使った自然体験や、生きものの「食う食われる」の関係を目（ま）の当たりにすることによって生まれるでしょう。それが、後に知識として知る「生態系」や「生物多様性」への理解を深め、「自然のとらえ方（自然観）」を培い、生態系の循環や自然の有限性といったことへの本当の理解につながるのです。

「子どもたちと自然観察をするのは、自然科学者を育てたいのではなく、将来どんな職業についても、ちゃんとした自然観を持っている大人になってほしいからなんだよ」との浜口哲一さん（元平塚市博物館館長）の生前の言葉が思い出されます。

子どもたちの自然体験の場づくりは、保護者を含めた大人たちの意識次第です。地域を拠点とする学校や幼稚園・博物館などと連携して自然観察会を開けば、たくさんの機会をつくることができるでしょう。個々の自然観察指導員に期待される役割も非常に大きいのです。

子どもたちがいつまでもドキドキワクワクできるような懐の深い自然を身近に残し、その純粋な感性に、共に感動していきたいものです。

### 自然観察路マップづくりではじめの一歩

「わたしの自然観察路コンクール」は、自然観察路マップを自分でつくることを通して日ごろ見過ごしてしまうような身近な自然を注意深く見つめ、子どもの「なぜだろう」「ふしぎだな」という探求心を引き出し、さらに「大好き」「大切だな」という愛着をはぐくむためのプログラムです。2013年は6月から作品を募集する予定です。ぜひご参加ください。（詳しくはこちらhttp://www.nacsj.or.jp/project/kansatsuro/）

▶2012年度中学生の部・優秀作品
『明石海峡人の街・鳥の道』大須賀詩織